

4. つながる～横断的組織を活かした事例検討～

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「iライブラリーモニター校」に応募し、「iPad 版ドロップトーク」(図3)を借用した。借用手続きを研修部、機器設定を情報教育部、フィッティングを自立活動部と「ATライブラリー」係内で分担して取り組んだ。

対象生徒は、自立活動を主とする教育課程に在籍する高等部2年生で、主なコミュニケーションは、教師からの音声による選択肢の提示を受け、「Yes/NO」を表情(笑顔)で選択する手段とひらがな50音表を活用して一音ずつ選択する手段であった。不随運動はあるものの右手人差し指による指さし動作が可能であった。担当教員は、生徒が自分の思いをよりスムーズに音声で伝えるための手段と生徒自身が自分でできることの環境設定を課題としていた。はじめ、朝の会の呼名場面で「iPad版ドロップトーク」を使用した。教員がタブレット端末を持って生徒の手元に提示した。しかし、教員が持っていることでタブレット端末が不安定であったことと不随運動により上手くタップしたりスライドしたりすることができなかった。そこで、自立活動部の担当がユニバーサルアームと車載用デバイスフォルダを用いて、

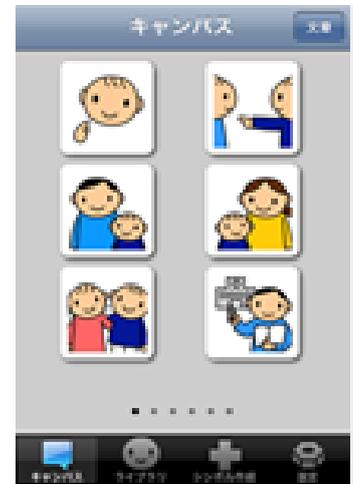


図3 アプリ「ドロップトーク」

生徒の姿勢や右腕、指の動きに合わせてセッティングした。生徒が意欲的に取り組むことができそうなアプリを情報教育部の担当が紹介し、まずは操作を楽しむことから始めた(図4)。そのことにより、自分で右手(拳・手首)や人差し指の動作を改善し、うまく操作ができるようになった。スタイラスペンや手袋などを用いたことでより操作性が良くなった。これらの取組により、「iPad版ドロップトーク」「かなトーク」(図5)のアプリを用いて、朝の会だけではなく、学習や休み時間にも積極的にタブレット端末を活用し、今までなかなか交流の無かった他学級の友達と会話するようになった。課題としていた音声によるスムーズな伝達と自分でできることの環境設定を改善することができたと同時に姿勢の改善によって、右手の可動域の拡大を図ることができた。



図4 手首での操作をする生徒

あいうえお									
発声	前削除		全削除		小	・	°		
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
を	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
ん	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
、	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
。	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

図5 アプリ「かなトーク」

※ 本事例(特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例)は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「B-292 特別支援学校(肢体不自由)のAT・ICT活用の促進に関する研究一小・中学校等への支援を目指して一」(平成26年3月), 31-32に記載された内容である。